

断食体験

中濱 基博

2003年9月より、イランへ語学習得のため留学した際に、断食を体験する機会があった。その経緯と目にした日常を記す。

まずテヘラン大学付属ローガットナーメ・デホダーと呼ばれるペルシア語語学センターに入学した。テヘラン大学付属ということで、テヘラン大学生と同様な資格を持ち、外国人でも大学寮に入ることが出来るからだ。一人で生活できる語学力は全くなく、食事もままならないと考え、入寮を決意した。

が、いざ入寮手続きをしようにも各部署をたらい回しにされる、第一の洗礼。しかもローガットナーメ・デホダーとテヘラン大学本校は随分と離れたところにあり、何度かその間を往復する羽目に。そして第二の洗礼、交通事故。現在、テヘラン市内はおびただしい量の車が縦横無尽、なかば無法状態で走り回っており、一日で3回連続乗っていたバスやタクシーが接触、追突事故を繰り返す。極めつけはタクシーから降りようとする他の客が、猛スピードですり抜けしてきたバイクをドアで跳ね飛ばす事故を目の当たりにする。

そんなこんなで何とか寮生活を始めた。寮内はイラン人学生棟と外国人学生棟に完全分離されており、「イラン人学生との生活でペルシア語を身につける」という目論見はあえなく崩れ去る。そんな私のルームメイトはアルバニア人。そもそもアルバニアがヨーロッパの小国であることはすぐわかったが、その場所、文化などまったく知識がなく、会話の糸口すら見つからない。さらに彼は数年

間、ルームメイトがいない生活をしていたので、二人入居の部屋を一人で使い続けている。よって室内には彼の所有物があふれており、新たに入居した私のためにそれを片づけようとはしない。同室とはいえ、私にとってはこのアルバニア人の部屋に申し訳ないが住まわせてもらっている、といった方がわかりやすい。

そんな彼との生活は不満が一杯でストレスはたまる一方。他人と生活しなれていない彼は、今まで通り、一人での生活スタイルを貫く。室内にある押し入れは4つあるにもかかわらず、彼が3つ使用する。通常、二人で生活するなら、平等に2つずつだろうが、彼にその気は全くない。その他、備え付けの冷蔵庫に関して、彼が独占使用し、私が使うことは叶わない。また突然大音響で音楽を聴きながら、勉強を始める。文句を言うと音量を少しだけ下げ、「これでいいだろう」と不機嫌になる。それでもまだ静かというにはほど遠く、これ以上文句を言うだけ無駄だと思わせる。要は公共性の全くない人間との共同生活を余儀なくされたわけだ。

そしてそんなストレスのたまる生活も一ヶ月半ほど過ぎた頃、ついに断食月が始まる。断食が始まる前、このアルバニア人が珍しく話しかけてきて、「日本にも断食はあるのか」と問う。仏教徒の高僧がやったりすると聞いたことがあるが、一般人はしないだろうと答えると、「出来ないのか」と。加えて「俺はイスラム教に改宗したから断食月はもちろん

断食をするけどな」とあからさまに「おまえは出来ないだろう」と挑発的な態度。ここまで言われては日本代表として、男として負られない。また断食する機会は日本ではないだけに、やり終えればそれなりに良い経験なるだろうと考え、「じゃあ俺もお前同様に断食をしてやる」と大宣言。そうやって一ヶ月に及ぶ戦いの火蓋が切って落とされる。

断食初日、深夜3時に轟音で起こされる。ルームメイトがセットしていた目覚まし時計の音だ。日の出前までに食事を終えなければ、その後日没まで一切食事することが出来ない。よってこの時間に食事することになる。はじめは半信半疑で寮内の食堂へ足を運んでみると、イラン人学生が大挙して押し寄せており、深夜4時だというのに活気に満ちている。空には星が輝いている。

語学センターの授業の方は普段午後3時から5時なのだが、断食中は30分早くなる。日中何も口にすることなく、生活しているだけに、日没後すぐに食事をしなければ危険だという判断だろうか。授業後いつも利用しているバスターミナルに行くと爆音でアザーンが聞こえてきて、周りから歓声が起こる。ほどなく、お菓子を人々に振る舞う人が、数人どこからともなく現れる。我先にと皆手を伸ばし、いい大人が子供のようにお菓子を頬張る。そんな光景を見ていると、「お前も食え」と菓子箱を差し出される。色とりどりのお菓子が並べられているが、どれも見るからに甘そう。とりあえずひとつ口に入れるが、ただただ甘いとしかわからない味だ。後日わかったことだが、日中何も口にしていないうちに、日没後、すぐに血糖値を上げないと危険だということで、甘いものをすぐに口にすらしい。以前私と同じ語学センターにいた日本人女性が、断食期間中に突然教室で倒れたとき

も、意識が朦朧とする中、イラン人教師たちに角砂糖を無理矢理口の中に放り込まれたそう。彼女は断食が原因で倒れたわけではなく、妊娠が原因だったのだが。

日中、断食している者は誰も、やる気をなくしてしまう。全く飲み食いすることなく働くことはやはり辛い。そんなこともあり、行きつけのピザ屋は断食月、日中営業が出来ないので、一ヶ月をかけて改装を試みていた。他にもこの時期を利用して改装している店を見かけた。断食が終わる頃には新装開店の準備が始まるのかと思いきや、そうはいかない。まったく工事は進んでいないのだ。というのも、工事関係者も断食をおこなっており、肉体労働を強いられる彼らにとって、日中飲まず食わずに働くことは無理なことだ。よって計画通り工期を終えることはない。知人のイラン人に言わせれば、「断食中に営業しても儲けがないからといって、断食明けのために改装して儲けようとする奴らはろくなものじゃない。だから新装開店が断食明けに間に合わないのを見るといい気味だ」とのこと。

私にとっては、日の出前の食事がどうしても身体に合わなかった。早朝4時から5時に食事をすると睡眠時間を分断されてしまい、しっかり眠った気になれず、疲れもたまる。最後の一週間は日の出前の食事をとらず、「あと一週間の我慢だ」と自分自身に言い聞かせ、日中の空腹に耐え続けた。その分、日没後の食事量が増えて、結果太る。断食を始めたとき、「断食中に痩せるイスラム教徒はいない」と知人のイラン人たちによく言われた。なぜかすぐ分からなかったが、経験した結果、やはり一食事での量が増えるのが問題なのかもしれない。またイラン人は日没後の食事後も、深夜0時くらいにまた食事をしており、あまり眠ることなく日の出前の食事もとっていた。

これでは痩せるはずもなく、逆に太るのも道理だ。

断食月があけると世の中はお祭り騒ぎになる。普通は家族親族や友人たちと一ヶ月間の断食をたたえ合い、やり終えたことを祝いあうのだ。しかし初体験の私は、そんな気力すらなく、ようやく終わったという気持ちから、ただただベッドに横になっていた。丸一日ほど眠っていたらしい。起きたら世の中は以前と変わりなく動き始めていた。断食をしていたことなど全く感じさせることなく。